

6月24日

## 京都府連盟 無雪期搬出訓練報告

平尾 繁和

6月24日、数年ぶりとなる屋外での無雪期搬出訓練が近江高島の天頑山周辺で行われました。山友会からは、下坂、山下剛、藤村、平尾の4名が参加しました。安全登山への意識の高まりを反映してか、全体で120名を超える参加でした。(今回、滋賀労山にもよびかけ13名が参加)前半は、変電所前でやましな山の会担当の応急手当があり、従来のやり方と異なり、参加者を14の班に分け、班毎に「山行中に仲間が骨折した場合を想定し応急手当を施す」を課題に、手首、足首、鎖骨の骨折に分れ、持ち合わせの用具等を使い班内で日頃各会が実践している方法を出し合って手当を施し、それを後ほど発表し共有するというやり方がとられました。その時々パーティの手持ちの物を使って工夫して少しずつ違った方法で手当がされました。基本は、骨折箇所の上下2関節を動かさないよう固定すること、指先が確認できるように全てを覆わないことを守り、その他はこれが正解で、他はダメというものではありません。新聞紙や、固定するためストックの一部を入れてテーピングテープで巻いた班、巻き方も腕を一回りすると圧迫して血流が止まる恐れがあるのでずらすこと。各部位のポイントは、手首：新聞紙やクッションをあてテーピングで動かさないよう固定し、三角巾で首から吊りさげ、もう一枚三角巾で胸をまく。足首：三角巾で靴の上から足首を固定、足首と膝の固定にストックを使った班もありました。鎖骨：三角巾を首から前にかけて脇の下から後ろに回し交差させ締め上げ胸が反るようにして縛る、その時、折れた骨が食い違わないように注意する。三角巾やテーピングテープ、新聞、クッションなどたくさんある方がうまくいき、誰かが持っていればよいのではなく、一人一人が装備の中に常に持っていることが大切だと思いました。



その後、山中に入り労山救助隊から、沢のぼり等の事故で負傷者を搬出する方法として、3本長いロープを渡し、負傷者をロープで移送するチロリアンブリッジ(谷やクレバスなどで両端を固定したザイルを伝って渡ること)の実演がありました。

昼食後、参加者が実際に行う搬出訓練が行われました。ロープを使う搬送と、ロープを使わずネットで搬出する2つのグループに分かれて行われ、山友会の4人は、ネット搬送を班に分れ実践しました。天頑山の山道で実際に負傷者役を載せ6人で救助が来る場所まで引き上げ、引き下ろす訓練をしました。体育館など平坦な所での搬送は何度かおこないましたが、実際の山道でやってみるのは初めてでした。段差があり濡れて足場の悪いところ、倒木をまたぐ箇所など結構大変で、気温も高い中汗がぼとぼと滴り落ち、何回もメンバー交代をしながら訓練しました。反省会

では、終了間際にネットがビーと音がして一部ちぎれた班もあったが、長時間におよぶ搬送にはネットを2枚重ねるか、もう少し幅の広いものを利用し端を折り返して使うことで対処する必要があるのではないか。負傷者に声をかけることや、先頭が段差や杭など足元の様子を伝え運び手同士で声を掛け合うことが大切、スリングを使い肩にかける場合、初めに運び手全員が持ち上げその長さ調整をすること。ストックのどの部分をどの程度伸ばして使うのがよいか、搬送者の足先にストックを渡した班や、ザックの代わりにビニールシートを使うなどの工夫や、いろいろ研究課題もあげられました。実際にこういう事態が起きた場合、ネットを持っていれば救助を待つ安全な場所まで搬送が可能なが理解できました。最後にザックを使った搬出のデモが救助隊で行われました。



<ザックを使った方法>



<ザック同士をカラビナでつなぐ方法>



毎回、いわれることですが、このようなことをしなくていい、事故を起こさないことが何より大切です。それでも山行中のケガや事故は起きていますし、いつ誰がこういう状況にあうかわかりません。万一事故がおきた時、応急手当や搬出法を知っていて使えるかどうかで、お互いを守ることにつながります。何回やっても忘れてしまうことが多いのですが、他人事と思わず、装備品として救急用品・用具を携行し、応急手当や搬出法を繰り返し学びしっかり身につけることは今後とも不可欠だと改めて思いました。